

「1967年生まれのヒーロー」

校長 小林 大 介



今年の3月24日、テレビのニュースで流れた古賀稔彦さんのご逝去に、私は思わず「えー！」と声を上げてしまいました。私と同世代から上の方々は、1992年バルセロナオリンピックで右足を負傷しながらも、見事な一本背負いを武器に、金メダルを獲得した姿を今でも思い出すことができる人も多いと思います。「平成の三四郎」と呼ばれたその美しい技と日本人の心を思い起こしてくれるその振る舞いに、日本中が注目していたように記憶しています。また、私より若い世代でいうと、2004年のアテネオリンピックで、谷本歩実選手の金メダル獲得に導いた全日本女子柔道チーム強化コーチとしての古賀さんを思い出す人が多いのかもしれませんが。金メダルが決まった直後、谷本選手と古賀監督が喜び合うシーンは、多くの日本人の心に焼き付いていると思います。

古賀稔彦さんは、1967年（昭和42年）11月21日生まれで、私と同じ年の生まれの53歳でした。同い年のヒーローとしていつも応援していました。訃報を聞いて驚き、インターネット等で古賀さんについて調べてみると、これまで柔道家として大変素晴らしい活動をしており、教育者としても大変しっかりとした理念をもっていたことが、改めて知ることができました。

古賀さんが塾長として03年に設立した『古賀塾』（柔道を通して、人間形成の支援活動や社会貢献、オリンピックやパラリンピックを中心とした選手の指導及び育成事業を行なう）の活動理念が、私が考える教育理念とかなり近いものがあり、学校経営にも生かされるものであると感じました。

「夢を実現するために、決心することが大切。」「自分に目標を与える。あきらめからは、決して何も生まれえない。」「自分で問題解決できる選手を育てる。」など、変化の大きな時代だからこそ重要である内容が込められていました。

「どんな人にも生まれきた役目があると思います。どんな小さな役目でもいいのです。その人がもっている役目や才能を引き出していくのが古賀塾の役目だと思い取り組んでおります。人と人との絆や優しさなど魅力ある人づくりそして柔の心をもった柔道家をしっかり教育しています。」という言葉がありました。古賀塾を学校、柔道家を社会人と置き換えるだけで、今、中学校に求められている教育の本質になると感じました。

世界に誇れる柔道家の古賀さんがお亡くなりになったことは、日本人にとって大きな損失といえると思います。その思いを柔道やスポーツだけでなく、いろいろな形で学校教育にも生かしていきたいと考えております。